

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所: 川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話: 044-988-0004(柿生中学校)
<http://www.kakio-kyodo.com>
 第78号

失われゆく記憶遺産～その3

「神社」は郷土のルーツを知る語り部: 岡上の場合 (2)

** 岡上神社創設の苦勞と人々の思い **

今回は岡上神社の創設と、村人の苦勞や思いについて、考えてみたいと思います。

明治42年に岡上神社が創設されるまで、岡上村には五つの神社がありました。村社として剣神社(つるぎじんじゃ)が祀られており、他に諏訪神社や宝殿稲荷社、開戸稲荷社、日枝神社が祀られていました。合併前の各社の位置をあらわす右の地図を見ますと、現在の岡上神社は当時の諏訪神社の位置にあることが分かります。

本来ならば新しく創設された岡上神社は、それまでの村社である剣神社の位置にあっただけでいいはずですが、そうではありません。この点について次のような背景があったものと考えられます。

第1番目に、諏訪神社の位置が村の中心に近く、民家も多かったのではないかということです。それは、江戸後期、村の中心になる高札場が、現在の駐在所付近にあったことなどからうなずけます。



合併前の各神社の位置(注: 宝殿稲荷とあるのは宝殿稲荷の誤り。また山王社とは日枝社のこと。)



剣神社社殿跡

第2番目に、新しい神社には相当な額の基本財産が必要でした。明治40年12月、神奈川県訓令第49号の「県社以下神社設備並会計規定」に村社の基本財産として「年額五十円(現在の約100万円)以上の収入ある動産又は不動産」を所有することが義務付けられています。その基本財産を得るために、広い境内があり、そこに育つ大量の樹木を伐採し、資金にできる剣神社の存在が重要なカギを握っていたのではないかと思います。明治期の「各神社立木入札開札ノ控簿」によると、明治43年の11月に入札にかけられた樹木の落札価格は日枝社跡が71円(現在の約142万円)、開戸稲荷社跡が115円(現在の約230万円)、宝殿稲荷社跡のものが87円(現在の約174万円)、剣神社跡のものが1220円(現在の約2440万円)でした。結果として、岡上神社には合計1493円(現在の約2986万円)の収入があり、基本財産が蓄えられました。このように岡上村の神社を存続させるためには、広い敷地を持つ剣神社の貢献が大きかったようです。

第3番目に、それまで岡上にあった五社は、それぞれ特定のイッケ(同族組織)により祀られていました。明治期における各神社の総代氏名をみると、当初のイッケに加えて異なるイッケの名も入っています。例えば、明治42年3月に神奈川県知事宛で出された「神社合併並びに社号改称願」によると、岡上五社の各氏子・信徒総代の中に、梶家は三社にわたって出てきます。あるいは、日枝社を祀る山田氏は開戸稲荷社にも出てくるなど、神社と関係の深いイッケは必ずしも固定されたものではなくてきていたようです。つまり、明治期、岡上の五社はイッケとのつながりだけでなく、岡上村民全体の信仰の対象としても意識されてきたのではないかと考えられます。このようにして、神社の合祀は村人の合意を得ることができたのでしょう。

第4番目には、東光院の存在の大きさがありません。新編武蔵風土記稿に登場する剣神社・諏訪神社のいずれも「東光院の持」と記載されています。村をまとめるといふ視点から考えると、東光院の存在は大変重要です。

これら4つの背景のもと、当初の村社であった剣神社に固執せず、その後の村全体の平和と利益を考えるという視点に立つことが重要だ、ということになったのではないかと考えられます。

その結果、新しい村社の場所は、村の中心に近い諏訪神社の位置になりました。社名は既存五社の名に拠らず、村の名前を採り「岡上神社」とされました。村社維持を支えた財源は、一番敷地を持っていた剣神社の樹木の売却資金でありました。以上のように岡上神社創設時の状況を考えました。(文:板倉)



旧剣神社から移築された岡上神社一の鳥居(大正15年再建)

(参考資料:「成城文芸」一村落における明治末期の神社整理)

シリーズ

「麻生の歴史を探る」第48話

麻生郷 ～尊氏領～

小島 一也 (柿生郷土史料館相談役)

麻生という地名が初めて公文書(文献)に出るのは、元弘3年(1333年)8月5日付の後醍醐天皇による建武の中興の恩賞の中で麻生郷が足利尊氏に与えられたことを記す文書(比志島文書)です。尊氏は全国に多くの所領を得ますが、そのひとつが鎌倉に近い麻生郷で、その文書中に時頭とあるのは北条一門の安達時頭と思われ、鎌倉幕府直轄の時頭の所領が尊氏に与えられたといわれます。なおこの時頭は執権職を務めた名族で、元弘3年鎌倉東勝寺で北条高時とともに自刃しています。

こうして得た麻生郷を尊氏は康永4年(1345年)に足利家の祈願所である鎌倉山の保寧寺(現在廃寺)に寄進しており、その折保寧寺は公儀守護代から「武蔵国麻生郷内本郷堀内乳牛役之事、諸御公事御免之間、不致沙汰之条、所見分明之間、任先例令閣之由候也 仍執違如件、康永4年2月10日 薬師寺橋(花押) 保寧寺長老」(岡本文書)を得ています。これは麻生郷の名が記された2番目の公文書で、麻生郷の中の本郷・堀内について乳牛役(乳牛を対象とする税)を先例の通り免除するとしたもので、薬師寺橋とは幕府の公儀を勤める役人の名と思われ、保寧寺長老宛になっています。



麻生郷尊氏所領文書

そして3番目に麻生郷の存在が分かる公文書は、正平7年(1352年)足利尊氏が自領の麻生郷を争乱から守るために出した禁制(相州文書)で、「武蔵国都筑郡内本郷堀内 軍勢甲乙人等 不可致乱入狼藉 若令違反者 可処罪科之状如件 正平7年正月8日 尊氏花押」と記されており、この頃足利尊氏・忠義兄弟確執は忠義が鎌倉を占拠、菅の小沢城を焼いています。軍勢甲乙とあるのはこの時尊氏は軍勢を率いて鎌倉入りをしており、その折尊氏は尊氏道の早野から麻生郷に立ち寄っていたのでしょうか。

奈良から平安時代、武蔵国都筑郡には餘戸、店屋、立野などの郷名はあっても麻生の名はありません。その名が出るのは鎌倉末期と思われていますが、定かではありません。はっきりさせるのが前記の3公文書ですが、これらの文献は中世におけるこの地方の歴史を探



る上で大変貴重で、県・国資料館所蔵となっています。

この文書でわかることは、この麻生郷は尊氏の所領となる以前は北条一門安達氏の領地で、尊氏はこれを踏襲していることから、鎌倉期から麻生郷は在ったかとも思われる事と、麻生郷内には本郷・堀内という所があり、当時この地には乳牛が飼われていたことです。そして尊氏はこの地にのみ治安保護の禁制を出したのか、興味深いものがあります。

それではこの本郷、堀内とはどこを言うのでしょうか。このことを武蔵風土記稿は「麻生」の項で「此郷名ヲツカウモノ王禅寺、万福寺村に限り・・・」として王禅寺村は麻生より別れたと記し、郷の中心は上・下麻生とし、川崎市史は本郷・堀内が上下麻生村内を前提に、本郷とは中心となる集落、堀内とは武士か豪族の館ではと述べ、鶴見川中流域のこの地に乳牛が飼育されていたのでは、としています。

参考文献:「川崎市史資料編」「新編武蔵風土記稿」「川崎市地名辞典」



シリーズ 黒船来航

開国秘話 (14)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆後日談その1 日米修好通商条約の締結◆

日米和親条約締結から2年、1856(安政 3)年に、米国総領事としてハリスが下田に着任します。ハリスとの交渉で、幕府は一層の開国を決意しますが、反対派を説得するために、天皇の勅許を得ようとします。

しかし、現実政治から遠ざかって久しい天皇と朝廷は、当時の世界の趨勢を知らず、「薪水の供与のために港に立ち寄るだけならともかく、神国日本に異教徒を上陸させては、御先祖さまに申し訳ない」と理性のかけらもない感情論を掲げて、勅許を拒否したのです。

事情を知ったハリスは、「もしここで、我らの国アメリカと、アヘンの禁輸を含む通商条約を結ばないと、イギリスが武力で条約締結を迫ってくるだろう。そうすると、アヘンの輸入を禁じることは出来なくなる。」と、日本側の説得に努めました。

大老井伊直弼は、これを尤もと認め、天皇の勅許のないままに、1858年7月29日(安政5年6月19日)に、日米修好通商条約を締結しました。

調印は神奈川沖・小柴(八景島周辺)に停泊中のポーハタン号で行なわれました。日本側代表は下田奉行の井上清直・目付の岩瀬忠震(ただなり)、アメリカ側の全権はハリスでした。

その後、日米修好通商条約の批准書を交換するために、正使新見正興、副使村垣範正、監察小栗忠順を代表とする遣米使節が、万延元年にポーハタン号で米国に派遣され、その護衛の名目で木村喜毅を副使とする咸臨丸も、米国に派遣されました。咸臨丸には勝海舟が艦長格として乗船し、また木村の従者として福澤諭吉も一緒に渡米しています。

桜田門外の変が発生し、井伊直弼が暗殺されたのは、使節団の米国訪問中のことでした。いつの世にもわからずやはあるものですが、この時、勅許なしでの条約調印に踏み切った幕府側の英断がなかったら、日本の近代はどのように暗転していたかと考えると、ゾッとしますね。

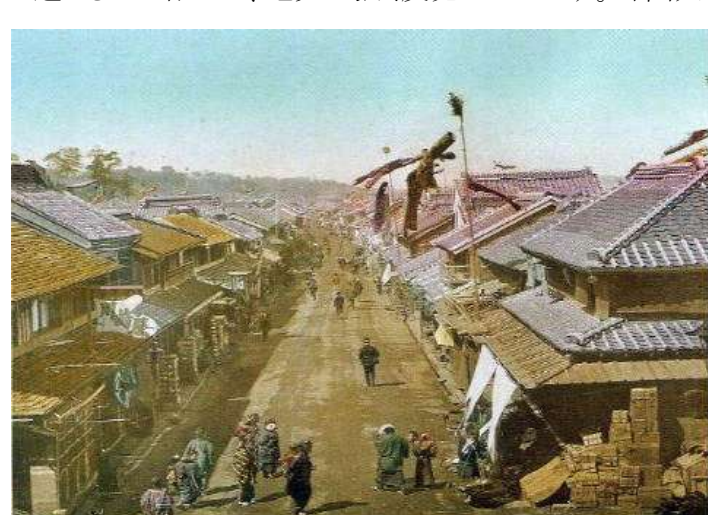
◆後日談その2 横浜開港のいきさつ◆

ところで、日米和親条約の締結地であった横浜は、その後日米修好通商条約による5ヶ所の開港場の1つとなりました。首都に近い横浜。そして日本の商都大阪に近い神戸。この2つの地の開港は、米国側の提案ではなく、交渉に当たった幕臣岩瀬忠震(ただなり)の提言によるものでした。

岩瀬は、欧米との貿易を担うことになる開港場は、大きな賑わいを見せることになるだろう。もし、江戸や大阪に近い場所に、開港場を設けなかったとしたら、近い将来江戸や大阪の経済は、必ずや衰退に向かうに違いないと主張して、上層部を説得したのです。

こうして、長崎、新潟、函館とともに、神奈川と兵庫が開港場に指定されました(5番目の港が開港した時点で、下田は閉鎖されることになりました)。

横浜と神戸ではなく、神奈川と兵庫が指定されていました。神奈川は、現在の東神奈川駅周辺でした。ところが当時、神奈川は東海道の宿場町として栄えていましたので、こんなところに外国人が大勢居留することになっては、何が起こるか心配だと、地元が強く反発したのです。外国人とのいざこざを恐れた幕府も、それは尤もだと考え、「神奈川は水深が浅く、大型船が入れない」という理屈をつけて、水深が深くて後背地が広い横浜村に港の位置を勝手に変更してしまったのです。



1859年頃の元町通り。海辺に港湾施設と外国人居留地を用意するため、半農半漁の横浜村の住民たちは、現在の元町周辺に移住、外国人相手の職業に転換しました。

もちろん米国をはじめ、英・仏・露などの諸国は、「条約と違う！」と抗議の姿勢を見せました。しかし幕府は、「いや、横浜も神奈川のうちだから」などとごまかしつつ、横浜で波止場や商館の整備を急ぎ、既成事実化を進めてしまったのです。気がつけば、横浜は大貿易港に発展し、神奈川は横浜に飲み込まれてしまったというわけです。何しろ横浜市神奈川区なのですから…。

兵庫と神戸についても、事情はほぼ同じと考えて良いでしょう。実は、この徳川幕府の姿勢を、明治政府も引き継ぎます。明治政府は1872(明治4)年の廃藩置県に際し、横浜と神戸を含む地域を、神奈川県と兵庫県と名付けることで、列強に対する徳川幕府の強引な言い訳を、巧妙に正当化したのです。当時の日本外交、実にしたたかでした。

(続)



岩瀬忠震

日帰り史跡見学バスの旅 好評裏に終了

9月18日(木)、43名もの一般参加の方を得て、三浦半島の史跡を訪ねるバスの旅を無事に終わらせることができました。

観音崎では、間近に房総半島が見えることに驚き、浦賀では、浦賀湾の渡し船を楽しみ、久里浜のペリー記念館では、学芸員の方のお話を伺いました。さらに横須賀では、日露戦争の旗艦「三笠」を見学後、地元の議員さんのお力添えで、ちょうど寄港していた自衛艦を説明付きで見学できるハプニングにも恵まれました。

ご好評頂いたことを受けて、今後継続して計画を立てていきたいと思えます。参加された皆様どうも有難うございました。



柿生郷土史料館開館日のご案内

◎開館日：奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日

11月 2・9・16・23日(毎日曜日) **12月** 6・13・20日(毎土曜日) 11月30日、12月27日は休館

◎開館時間：午前10時～午後3時

柿生郷土史料館11月以降の催物ご案内 (入場無料)

第8回 実物のミニ歴史資料展

本居宣長と国学の世界

◆展示品：「古事記伝(写本)」「直毘霊(なほびのみたま)」「詞の玉緒(ことばのたまのを)」「馭戎慨言(ぎょじゅうがいげん・からおさめのうれたみごと)」「祝詞考(のりとこう)」 他

◆期 間：10月4日(土)～12月13日(土) (開館日：10/12月：土曜日、11月：日曜日)

◆内 容：「国学」とは、江戸時代中ごろから起こり、古来からの日本独自の文化を探求し、日本本来の姿を追求しようとした学問です。例えば「古事記」「万葉集」などの日本の古典についての深い研究がなされ、やがて明治維新の原動力ともなりました。

今回の展示資料は、本居宣長の作品を中心として、賀茂真淵、平田篤胤などの作品も集めました。これらの作品をもとに「国学」という学問を考えてみたいと思えます。

◇展示品ミニガイド：10月25日(土) 午前10時30分より資料展会場にて展示品についてご説明いたします。



第49回 カルチャーセミナー

鶴見川流域文化探訪シリーズ(1)

神庭(かにわ)遺跡と鶴見川文化

発掘調査報告と分析

■■■ 矢上川流域の縄文～古墳時代 ■■■

- ◆講師：栗田 一生 氏 (川崎市教育委員会文化財課)
- ◆日時：11月9日(日) 13時30分～15時30分
- ◆会場：柿生郷土史料館特別展示室
- ◆内容：Φ 鶴見川流域の矢上川を見下ろす丘陵地で発見された遺跡
Φ 約3,500年間の長期にわたり住居が存在した事実
Φ 鶴見川流域文化として考えられることは

第50回 カルチャーセミナー

鶴見川流域文化探訪シリーズ(2)

鶴見川流域の鉄文化を探る

■■■ 科学の目が解き明かす流域文化 ■■■

- ◆講師：伊藤 薫 氏 (日鉄住金テクノロジー)
- ◆日時：12月20日(土) 13時30分～15時30分
- ◆会場：柿生郷土史料館特別展示室
- ◆内容：Φ 鶴見川流域の砂鉄を使用した鉄文化はあったのか
Φ 鶴見川支流、早淵川流域西谷遺跡出土の鉄の原料と産地は？
Φ 日光台、大谷戸遺跡で出土した鉄の原料と産地は？